

## 序

1996年以来、20余年にわたり、遼寧省文物考古研究所と日本独立行政法人奈良文化財研究所は継続的に共同研究に取り組み、「東アジアにおける古代都城遺跡と保存に関する研究—三燕都城等出土の鉄器及びその他の金属器の保存研究」、「3 - 6世紀中日古代遺跡出土文物の比較研究」および「朝陽地区隋唐墓の整理と研究」という三つの研究課題を達成してきました。また、2010年から2015年にかけて、双方は「遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究」をテーマにし、第4次の共同研究を実施してきました。

1990年代以来、遼西地域における東晋十六国期の都城文化は、新たな考古学的成果を続々と累積してきてきました。主要なものとしては、まず、三燕の都城である龍城跡が発見され、龍城は朝陽老城区に位置することが確定しました。龍城の宮城門である南城門を検出し、城域のおおよその範囲が推察できるようになりました。獸面紋鬼瓦、蓮華紋瓦当、龍鳳紋を施した覆斗式および覆盆式の柱礎石などの建築部材が発見され、重要な資料となっています。一方、三燕の中心地である遼西の朝陽以北では、北票地域の南を流れる大凌河流域で、三官営子と「龍騰苑」遺跡が調査されました。また、周囲を濠で囲まれた内部空間に建築群が対称的に配置された金嶺寺遺跡が発掘されました。さらに1965年に発掘された馮素弗墓に関する報告書も刊行されました。

これらの考古学的成果は、東晋十六国期の遼西地域が東北アジアの政治・経済・軍事の中心地の一つであったことを示すとともに、当該期における東北アジア地区の文化伝播と交流、とりわけ三燕文化の朝鮮半島や日本列島文化への影響などを課題とする研究に、新たな資料を与えるものです。「遼西地域の東晋十六国期の都城文化の研究」と題する今回の中日共同研究は、まさにこのテーマを探究するものといえます。

今回の共同研究の過程で、日中双方は様々な方向や角度から研究を遂行しました。日本側の研究者が5回にわたり訪中し、朝陽老城の三燕龍城跡、朝陽北塔、「龍騰苑」遺跡、三官営子遺跡、金嶺寺遺跡など、三燕都城文化と関係のある遺跡を見学し、多くの遺物を調査しました。さらに講演会や学術交流も実施しました。中国側の研究者は4回にわたって訪日し、奈良の平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡など日本の古代都城遺跡や、高松塚古墳などの重要遺跡を見学し、そして関連する学術テーマに対し、講演会を開催して討論をおこないました。

また、共同研究の実施期間中に中日の研究者は、東晋十六国期における遼西地域の考古学研究に関する研究史を整理し、過去の発掘資料を改めて整理した上で刊行し、三燕文化

の形成および周辺文化に対する影響を研究し、三燕で出土した遺物に対する科学的な保護という技術的な問題を検討し、これにより新しい学術的な観点が生み出されました。2015年11月に今回の共同研究の総括として、中国瀋陽でシンポジウムを開催し、研究成果をめぐって意見を交換しました。

そして2016年、中日双方の協議の上で、今回の共同研究に参加した研究者の研究成果や関連する学術論文をまとめ、それぞれ両国で論文集として編集・出版することを決定しました。

本論文集に所収された論文は、新たな考古学視点から、東晋十六国期において遼西地域が東西文化交流の方面に発揮した作用を重点的に認識しつつ、今回の中日共同研究「遼西地域の東晋十六国期の都城文化の研究」についての成果を収録するだけでなく、三燕文化に対する考古学的研究の最新成果となっています。私たちは、三燕文化を含む東晋十六国期の都城文化の考古学的研究において新しい発見が続々現れ、さらに多くの研究者、とりわけ若い研究者がこの研究に参加し、さらなる豊かな成果を得ることを共に期待しています。

2017年12月

遼寧省文物考古研究所 名誉所長  
郭大順  
遼寧省文物考古研究所 所長  
呉炎亮